



ユースケース 3

フレキシブルワーク、実現のカギは
「コミュニケーション・コンティニュイティ」にあり

目次

エグゼクティブサマリー	3
問題提起	3
フレキシブルワークの導入があらゆる企業にとっての必須の課題に	3
課題の洗い出し.....	3
カギを握るのは「コミュニケーション・コンティニューイティ」	3
❖ 既存の製品/ソリューションに存在する問題点.....	3
❖ フレキシブルワークとは「コミュニケーション・コンティニューイティ」を実現すること	4
❖ フレキシブルワークの実現にあたって求められる条件.....	5
解決策としての TeamPage	5
フレキシブルワークの解となるコラボレーションツール「TeamPage」	5
❖ エンタープライズレベルの強固なセキュリティ	5
❖ 時空を超えた情報共有に役立つ「ダイジェスト機能」	6
❖ 重要な情報を見逃さない「ウォッチ機能」	6
❖ いつでも、どこでも、どのデバイスからでも行える「メール投稿機能」	6
❖ グローバル・レベルでの利用をサポートする「マルチ言語対応」	7
❖ リーズナブルな導入/運用コスト	7

エグゼクティブサマリー

生産性向上や事業継続性の確保などを目的に、多くの企業で、社員の働き方を再考し新しい時代に見合うものに変革していく動きが活発化している。これは、以前より推進されてきたテレワーク / 在宅勤務やサテライトオフィスに加えて、モバイルデバイスや Web 会議システム、クラウドサービスの活用など、IT の進展に伴って選択肢が大きく拡充されたことが大きい。ただし、それらの導入に際しては、セキュリティやコンプライアンス（法令順守）など解決すべきハードルが存在し、企業では“はじめの一歩”がなかなか踏み出せないというのが実情であろう。そこで本稿では、組織内での連続的なコミュニケーションに着目して、フレキシブルワークのありかたを考察し、その実現手段を探ってみたい。

問題提起

フレキシブルワークの導入があらゆる企業にとっての必須の課題に

この 10 年間に起こったインターネットやモバイル技術の飛躍的な進化と普及は、企業がコンピュータを業務に活用する環境に大きな変革をもたらすこととなった。かつて、毎朝定時に出勤して自席の PC で行っていた業務は、今ではノート PC やスマートフォンなどのモバイルデバイスや VPN のようなセキュアなネットワークを駆使して、自宅や移動中など会社の外でも快適にこなせるようになってきている。また最近では、スマートフォンやタブレットの普及に伴い、私物のデバイスを業務で活用する「BYOD (Bring Your Own Device)」の考え方も台頭し、多くの企業で検討が始まっている。

IT を駆使して、時間と場所にとらわれない柔軟な業務環境 = フレキシブルワークを主体的に押し進めてきたのは、外出の多い営業担当者をはじめとする現場の社員である。彼らがノート PC や携帯電話などのモバイルデバイスを携えて実践するフレキシブルワークは、個々人の業務生産性を高めることで、組織に受け入れられ、デバイスやネットワークの急速な進化と共に広く定着していった。

このように現場主導で進展したフレキシブルワークを、昨今では、全社的な IT 戦略の一施策としてとらえて導入する動きが加速している。各社員がそれぞれの職務や業務内容に応じて、最適なデバイスと作業環境を選びとれるようにすることは、スピードや変化対応力が強く求められる今日のビジネス環境において、企業全体の競争力向上やビジネス・コンティニュイティ（事業継続）の確保につながるからだ。これに加えて、ワークライフバランスを実現して、個々人の生活スタイルの多様化にこたえていけるようになる。そうした種々のメリットを考えれば、大半の経営者が検討すべき必須の課題と言っても過言ではないだろう。

したがって、ここでは、どのようなアプローチで、具体的にどんな製品を導入したらよいかを主眼にこのテーマを考えてみたい。以下、フレキシブルワークのありかたと、それを実現するアプローチについて探っていく。

課題の洗い出し

カギを握るのは「コミュニケーション・コンティニュイティ」

❖ 既存の製品 / ソリューションに存在する問題点

上述したように、変化の激しいビジネス環境を勝ち抜くために、また、生活スタイルや価値観の多様化にもこたえるためにも、企業は早急にフレキシブルワークを押し進める必要がある。その導入手段としては、ノート PC やスマートフォン、タブレットを社員に配布する方法をはじめ、Web 会議システム、シンクライアント / 仮想デスクトップ、クラウドサービスなどさまざまな IT 製品 / ソリューションが存在し、すでに多数の企業で実績が築かれている。しかしながら、それぞれに長所もあるものの、特に中小企業にとって導入時に障壁となる問題点も少なからず存在する。それは以下のようなものだ。

TeamPage コースケース 3 フレキシブルワーク、実現のカギは「コミュニケーション・コンティニュイティ」にあり
セキュリティ / コンプライアンス面での問題

社外から社内の企業情報システムにアクセスさせることになるので、VPN やファイアウォールなどを導入する必要があり、IT 部門には、新たなセキュリティおよびコンプライアンスの問題が加わることになる。特に、冒頭で挙げた注目の BYOD については、私物デバイスを業務で使うことで発生しうるリスクをきちんと見極めて、十分な対策を講じる必要があり、どの企業でも容易に導入できるとは言えない。

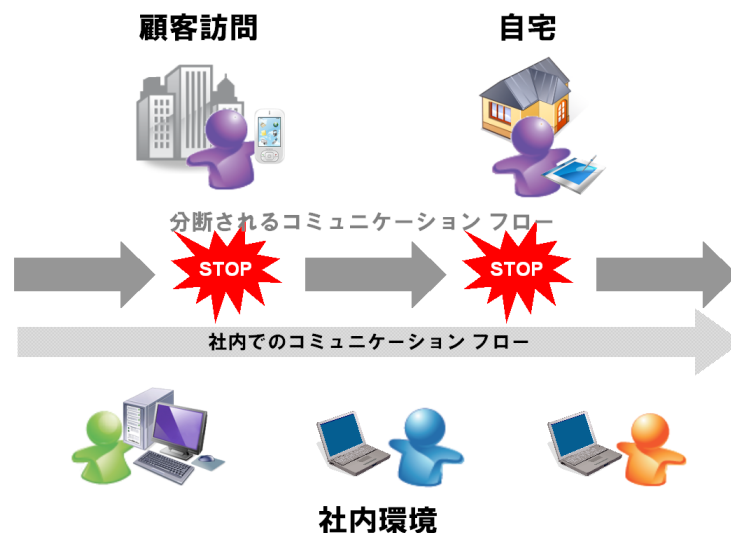
コスト面での問題

モバイルデバイスを全社員に配布するとなると、当然、デバイス購入や運用にまつわる、少なくない額のコストが発生する。また、シンクライアントや仮想デスクトップ、VPNなどを導入する場合も、稼働中の IT システムに改修を行う必要があり、その分のコストがかかってしまう。

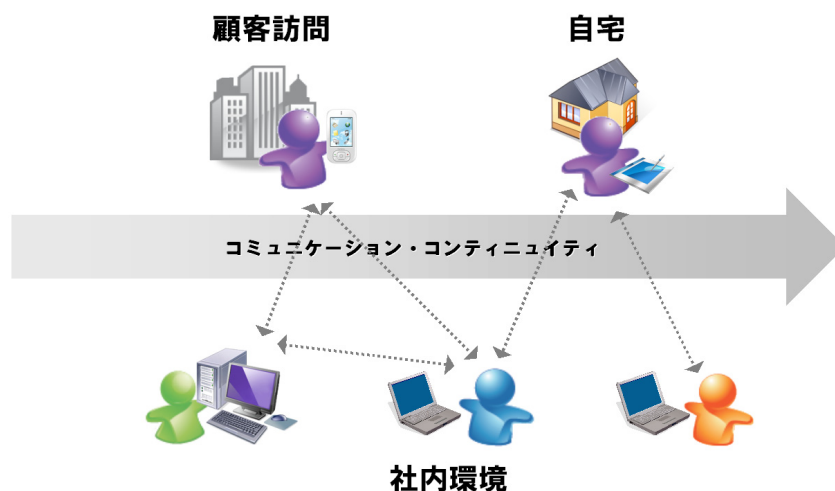
これらの問題を、バランスよく解決し、そのうえで投資に見合う効果をもたらしてくれるのが、企業が目指すべきフレキシブルワークということになる。以下、具体的にどのような効果が期待できるのかと、実現に際して求められる条件について考えてみたい。

❖ フレキシブルワークとは「コミュニケーション・コンティニュイティ」を実現すること

業務にまつわる組織内の連続的なコミュニケーションが途切れるのはなぜだろうか。もちろん、1 日の業務を終えて全社員が帰途につけば、実際の業務上のコミュニケーションや議論はいったん区切られるわけだが、ここで問うているのは、業務にまつわるコンテキスト（文脈）を含んだ組織のコミュニケーションフローの切断、分断のことである。



その答えは、「必要な時に / 必要な場所で / 必要なメンバーと / 必要なフォーマットの下で情報を双方向にやりとりできるツール」を持たないからである。そうした双方向のコミュニケーション / コラボレーションツールを導入し、組織全体で活用すれば、連絡を取りたいメンバーが外出中・出張中であろうが、拠点間に距離と時差があろうが、時と場所を超えてコミュニケーションフローが継続させることができる。いわば、組織の「コミュニケーション・コンティニュイティ」（コミュニケーションの連続性）を確保することで、ビジネスを滞らせることのないフレキシブルワークが実現されるのだ。おうした大きなリターンを考えれば、ネットワークやデバイスの技術が十分に成熟した今の時代に、ここに投資を行わない理由はないだろう。



❖ フレキシブルワークの実現にあたって求められる条件

では、コミュニケーション・コンティニュイティの実現に欠かせない双方向のコミュニケーション/コラボレーションツールは、実際にどのような特徴を備えているべきなのか。求められる条件を整理すると、次のようになる。

- いつでも、どこでも、どんなデバイスを用いても、会社で仕事をいているときと同じように、海外拠点を含めた共有データ・情報に対して簡単にアクセスできる
- データや作業履歴などを必要に応じて同時させることができ、業務利用上、必要なセキュリティ対策がしっかり施されている
- 既存の IT システムへの改修などが不要で、すぐに利用を始められ、導入/運用コストが極力かからない

解決策としての TeamPage

フレキシブルワークの解となるコラボレーションツール「TeamPage」

本稿は、コミュニケーション・コンティニュイティに着目したフレキシブルワークの実現手段として「TeamPage」を提案する。同ツールは、イントラブログ、Wiki、情報ポータル、文書管理システムのそれぞれの特徴を併せ持った、プロジェクトベースのコミュニケーション/コラボレーションを可能にする Web アプリケーションである。

スマートフォンの配布にしる、VPN やシンクライアントの導入にしる、利用を始めるまでに相応の構築期間を要するが、Web アプリケーションとして提供される TeamPage では、ライセンスを購入後、サーバーにソフトウェアをインストールするだけで、ただちに利用を始められる。また、コンシューマー向けのブログや SNS と同様、だれでも容易に操作が行える直感的な GUI が備わっており、特別なトレーニングを必要とせず、社員に積極的な利用を促すことが可能だ。

❖ エンタープライズレベルの強固なセキュリティ

TeamPage には、コンシューマー/個人ユーザー向けの SNS とは異なり、企業が業務で利用するうえで求められる強固なセキュリティ性能が備わっている。やり取りされるすべての情報は暗号化がなされ、メンバーのロール（職掌・役割）に応じた権限設定の下で、安全に利用することができる。

TeamPage コースケース 3 フレキシブルワーク、実現のカギは「コミュニケーション・コンティニュイティ」にあり

❖ 時空を超えた情報共有に役立つ「ダイジェスト機能」

TeamPage には、始業時間など設定した時刻に、TeamPage の作業空間である「スペース」上でやりとりされたすべての情報を自動的にサマライズしてユーザーに届ける「ダイジェスト」の機能が備わっている。この機能を用いることで、例えば、本社の社員が、時差の異なる海外拠点でのやり取りを毎朝短時間で確認することができる。



❖ 重要な情報を見逃さない「ウォッチ機能」

「ウォッチ」は、TeamPage に参加する特定のユーザーのアクティビティをフォローする機能だ。自身はフルコミットできないが、進捗を把握しておく必要のあるプロジェクトなどで、そのメンバーをウォッチリストに入れておくような使い方ができる。上のダイジェスト機能と併せてこの機能を活用すれば、ある業務に集中していても、他で起こった重要な情報を見逃すことがなくなる。



❖ いつでも、どこでも、どのデバイスからでも行える「メール投稿機能」

TeamPage のスペースへの投稿は、Web アプリケーションのフォーム以外に、メールによる投稿も可能である。他のメンバーの投稿にメールで返信するかたちで投稿を行えるため、携帯電話のような表示画面の小さなデバイスを使っているときでも即座にコミュニケーション/コラボレーションに参加することができる。

ユーザーは、必要に応じてメールの宛先 (TO) や同時送信先 (CC) を使い分けることで、情報共有の対象を容易にコントロールできる。投稿された情報はすべて TeamPage 上に自動蓄積さ

TeamPage コースケース 3 フレキシブルワーク、実現のカギは「コミュニケーション・コンティニュイティ」にあり、その時点からあたかもデータベースのように活用できる仕組みになっている。例えば、工場など作業現場のような、ノート PC を操作しにくいような場所でも、携帯電話やスマートフォンから、文書や画像、動画などをメール投稿することで、本社に作業記録や問題箇所の報告などを容易に行うことが可能だ。

■ メールで投稿

■ 返信はコメントとして関連付け

❖ グローバル・レベルでの利用をサポートする「マルチ言語対応」

TeamPage はマルチ言語に対応しているため、ダイジェスト機能の紹介で示した海外拠点のプロジェクトの進捗確認と同様、時と場所を超えたグローバル・レベルでのフレキシブルワークが実現される。

❖ リーズナブルな導入 / 運用コスト

TeamPage は、企業のサーバーにインストールする「TeamPage サーバー」と、トラクション・ソフトウェア・インクが運用する「TeamPage クラウド」の 2 種類が用意され、利用するスペース数、ユーザー数、オプションなどによって料金が決定されます。「TeamPage クラウド」の通常ホスティングのエントリー価格は、1 ヶ月契約で月額 7,908 円（税抜：10 スペース / 25 ユーザー / 10GB ストレージ）です。500 ユーザーで 1 年契約した場合は年額 625,000 円（税抜：10 スペース / 500 ユーザー / 10GB ストレージ）で、1 ユーザーあたり月額 100 円強相当で本サービスが利用できます。

これらの特徴に加えて、TeamPage には、外部アクセスからのセキュリティをより強化したいというニーズにこたえるべく、サイボウズの「サイボウズ リモートサービス」をオプションで用意している。例えば、客先や移動中など社外から頻繁に TeamPage にアクセスする営業部員に同オプションを使ってもらい、セキュリティ・レベルを高めるといったケースにおいて有用だ。サイボウズ リモートサービスの年間利用料金は、50 ユーザー・ライセンスで 29 万 8,000 円となっている（初期費用 3 万円含む）。

* * *

以上、今回は、コミュニケーション・コンティニュイティに着目したフレキシブルワークと、それを実現する TeamPage の特徴と機能を紹介した。目指しているのは、社内の業務環境と、フレキシブルワーク用の業務環境を使い分けるというのではなく、1 つのフレキシブルな業務環境の下、いつでも、どこにいても会社とまったく同じ感覚ですべてをこなせるようにするということだ。これにより組織は、海外を含む複数拠点間で、時と場所にかかわらずコミュニケーション・コンティニュイティを維持しながらビジネスを滞りなく進められるようになるのだ。

Traction® TeamPage™ は、米国 Traction Software Inc. の米国における登録商標または商標です。その他の製品名および会社名はそれぞれ、各社の登録商標または商標です。

著作権者および出版権者の文書による承諾を得ずに、本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載することは禁じられています。

Copyright © 2014 Traction Software, Inc. All Rights Reserved.